

ラオスにおける活動型中級コースの設計と実践

秋山 佳世・田渕 七海子

1. はじめに

ラオス国立大学付属ラオス日本人材開発センター(Lao-Japan Human Resource Cooperation Center、以下「LJC」)では、2001年5月の開所以来、一般成人を対象とした日本語コースを開講している。本稿では、LJCが2006年1月より新たに開講した中級コースの設計・実践・評価・改善について報告し、教室外とのつながりを重視した活動型中級コースの在り方や意義、課題を考察する。また、ラオスに限らず、その国・地域の環境を活かした魅力的な中級コースのモデルを提示する。

2. 新たな中級コース設計に至る背景

2.1 旧中級コース

2005年12月まで、LJCの中級コースでは、日本留学試験の受験を前提とした教科書である『ニューアプローチ中級日本語 基礎編 改訂版』および『ニューアプローチ中上級日本語 完成編』を主教材として使用していた。

これらの教科書は、『ニューアプローチ中級日本語 基礎編』の序によれば、「「日本留学試験」の実施をふまえ、中級学習項目を再検討して生まれた教材」である。さらに、『ニューアプローチ中上級日本語 完成編』のまえがきによれば、「基礎編」は、「初級終了時から中級への橋渡しと、中級レベルの土台固めのために、基礎となる文型・表現を体系的に学習しながら、読む力をはじめ4技能を総合的に高めていくことを目指した」もので、続く「完成編」は、「「基礎編」の形式を受け継ぎながらも、(中略)最終的に一つのまとまった文章が読め、一つの流れのある会話がができる力がつくように編集」されたものである。

旧中級コースは、この2冊分の教科書の内容を6段階に区切っており、全6学期(1学期=90分×週3回×12週間)、計2年間で修了することになっていた。総学習時間数は、約300時間であった。

2.2 問題点

しかし、当時、LJCでは、(1)初級コースを修了したものの、初級レベルの文法・文型・語彙を「知っているけれど使えない」中級コース受講生(以下「学習者」)が多い、(2)学習の意味を見失っている学習者が見受けられる、(3)この状況のまま中級レベルの文法・文型・語彙を積み上げ続けることに教師が疑問を感じている、(4)日本語を使う機会を望む声が学習者から多く聞かれる、などの状況が認識されていた。

このような状況が生まれた背景の一つには、ラオスで日本語を学んでいる学習者にとっては、

旧中級コースの目標や話題が「遠すぎる」ものであったことが挙げられる。具体的には、ラオスには、日本留学試験の受験を現実的な目標とする学習者はほとんどいない。むしろ、学習者の日本語学習動機は日本への憧れや知的エンターテインメントと言えるようなものが多く、学習目標も明確かつ具体的な者は少ない。また、教科書で取り上げられていた話題は、ラオスの学習者にとっては想像できないものも多く、限られた時間の中で多量の漢字を含む本文の内容を読解するのは負担が大きかった。さらに、得られる範囲の学習リソースを活用して自律的に学習を進めるための指導も不足していた。ゆえに、多くの学習者は、ラオスでなぜ何のためにそれを学ぶのかを考えることなく、自習の仕方もよくわからないまま、新たな学習項目や知識を次々とインプットされ、それを意味のある形でアウトプットすることもないという状況下で学習を続けていたと思われる。一方で教師は、このままではいけないのではないかという想いを強くしていった。

そこで、ラオスにおける中級コースの在り方を問い直し、新たな中級コースを設計し開講することにした。上述のような状況を改善する方法は、新たなコースを設計する以外にもあったが、より意味のある指導を目指し、コースの再設計を決めた。

3. 新たな中級コースの考え方

新たな中級コースは、2005-2006 年度第 2 学期（2006 年 1 月～）より開講した。LJC では、本コースを「中級コース」と呼んでいるが、実際のレベルは初中級程度で、「初級から中級への橋渡し」という位置づけのコースである。

先に 2.2 で述べた問題点を改善すべく、コースの目標を次のように定めた。

- (1) 初級での既習文法・文型・語彙を『使える』ようにする
- (2) 四技能を駆使して情報や考えや気持ちを『伝えられる』ようにする
- (3) 自律学習能力の促進を図る

このうち、本コースを設計するにあたり特に重視したのが (2) である。(1) の『使える』ようになることとは、知識の蓄積にとどまらず、アウトプットができる、すなわち誰かに『伝えられる』ようになることを意味する。さらに、日本語で『伝える』ことにより、学習者が日本語を介してラオス社会や日本社会と『つながる』こと、学習者とラオス社会あるいは日本社会が互いに影響や刺激を受けて『変わる』ことを期待した。これは、「教室内で日本語を学習することが目的」である閉じた状況から一歩踏み出して、相手を問わず、“日本語で『伝え』、相手と『つながり』、双方が『変わる』過程”の中でこそ、学習者は、ラオスで日本語を学習する意義を具体的に見出し、その醍醐味を味わうことができるのではないかと考えるからである。

また、LJC では、本コース修了後に学習を継続できる一般日本語クラスが開講されていない。そのため、学習者が本コースを修了し、教室を離れた後のことも見据えると、(3) 自律学習能力の促進を図ることも切実な目標である。

4. 新たな中級コースの概要

4.1 概要

現在、LJC は 1 年間 2 学期制（1 学期＝90 分×週 3 回×18 週間）を採っている。新中級コースも、InA・InB・InC と名づけた 3 学期間、計 1 年半の学習をすべて履修し所定の成績を満たすことにより、コース修了となる。各クラスの難易度は、InA から InB へ、InB から InC へと、易しいものから順に履修するようになっている。総学習時間数は、約 240 時間である。

学習者は、各クラス 5～10 名程度で、LJC の初級コースを修了し、本コースで学習を継続している者や、編入学者など様々である。その他の特徴としては、本コースの学習者は、卒業が近づいた大学 4・5 年生や、社会人が多く、日本語能力試験 3 級合格程度の学習者である。

また、LJC では、各クラスの授業は 2 名の講師が受け持ち、1 名が週 2 回、もう 1 名が週 1 回担当する。講師間の連絡は、授業毎の連絡ノートおよび口頭にてなされている。2008 年 3 月現在、本コースは、日本人講師 2 名が担当している。

4.2 学習活動の流れとねらい

本コースでは、『ジェイ・ブリッジ』を参考教材として、ラオスの文脈や学習者の既習項目に合わせた教材を作成し、授業を行っている。具体的には、扱う課の聴解 CD の内容や文法項目は変更せず、それらの文法・表現を使って、ラオスにいる学習者が自分のことやラオスについて『伝える』ことができるような話題・場面を設定している。語彙も、ラオス人の学習者が『伝える』際に必要となるものを導入している。また、例えば聴解 CD を聞く際にはスクリプトを配布するが、未習漢字のみにふりがなをふったり、聞き取った答えを書く欄に予め使用する動詞を載せておき聴解の手がかりを与えるようにするなど、内容・難易度ともに LJC の学習者に合った教材となるよう様々な工夫をしている。

さらに、各教材は、本の体裁を取らず、授業の進度に応じてプリントを配布することになっている。これにより、学期毎に前学期の実践をふまえて教材を適宜改訂・改善することができ、柔軟なコース運営が可能となっている。

実際の授業は表 1 のような流れで、グループ・ワークを活用しながら学習活動を行う。1 学期間に 2 課～3 課分を進めるが、1 課毎に表中の①～⑧を 2～3 回繰り返し、必要に応じて⑨のタスクや⑩の成果発表が設定されている。本コースを「活動型中級コース」と呼ぶ所以は、これらのタスクの達成や学習成果の発表を短期目標と定め、それらを達成するまでの過程を重視しているからである。ラオスにおいて“日本語で『伝え』、相手と『つながり』、双方が『変わる』過程”を実践するため、学習活動のねらいを意識した内容になるよう心がけている。

表 1 学習活動の流れとねらい

学習活動の流れ	学習活動のねらい
①導入	話題提供 (→『伝える』内容の意識化)
②語彙	ラオスの学習者が『伝える』際に必要かつ使用可能性の高い語彙を復習・導入
③発話	既習・新出の語彙や文法を使った発話 (→『伝える (練習)』) + ビデオ撮影
④聴解・読解	聴解／読解力を高めると同時に、『伝え方』の例として位置づけ
⑤意識化	a. ④を例に、自分の日本語力への気づき・自己評価 b. ③のビデオを見て、気づき・相互評価 + 講師によるフィードバック
⑥文法	学習者が『伝える』際に必要な文法事項を復習・導入
⑦作文 (空所補充)	⑥の文法事項の確認 (宿題)
⑧ ③の修正	④⑤⑥を踏まえ、③の内容を自己修正 (宿題) + 講師による添削・フィードバック
⑨タスク	a. 学習者の考えや気持ちが意識化されるようなタスク b. 日本について知ると同時に、自分や自国についても再考できるタスク (a. b. →『伝える』・『つながる』準備) c. 自律学習のヒントを提示
⑩成果発表	これまでの学習成果をまとめて発表する／試験 (学習内容をアウトプットし、『つながる』場＝短期目標)
その他	a. 活動や発表、課題に必要な技能面の指導 (→『伝える』・『つながる』準備) 中級クラスでの勉強の仕方、辞書の引き方 (辞書貸し出し) Eメール (Yahoo!JAPAN の ID 取得、日本語タイピング、マナー)、情報収集の方法 わかりやすい話し方、プレゼンテーションの仕方 原稿用紙の使い方 b. 漢字指導 c. 授業では扱わない文法事項の復習 (宿題)

5. ラオスにおける活動型中級コースの実践

5.1 ラオス社会・日本社会との『つながり』の実践例

本コースの学習活動のまとめである成果発表 (表 1⑩) は、学習者にとって具体的かつ短期的な目標となるもので、教室外とも連携を図り、学習者とラオス・日本社会が『つながる』きっかけとなるものを設定している。表 2 に、2007 年 3 月～2008 年 3 月の 2 学期間の実践例を示す。

表 2 2007 年 3 月～2008 年 2 月の実践例

クラス	学習テーマ	主なタスク・成果発表と教室内外との関わり	
		教室内	教室外 (『つながった』相手とその内容)
InA クラス 2006-07 年度 第 2 学期 (07 年 3 月 ～7 月)	L.1 紹介	L.1-1 自己・友人紹介、L.1-2 子供の頃の思い出、L.1-3 性格	
	L.2 旅行	◇E メール a. Yahoo! JAPAN の ID 取得 b. 送受信 (日本語タイピング、マナー) L.2-1 ラオス紹介 L.2-1 ラオスに旅行する人へのアドバイス L.2-3 ラオスの観光地紹介	InA クラス担当講師 他クラス (中級) の学生、LJC 日本語コース講師 作文発表 (試験) : 観光地の紹介
	その他		◇G 大学生のラオス国際協力研修サポーター (ホームステイなど、選抜者のみ)
InB クラス 2007-08 年度 第 1 学期 (07 年 9 月 ～08 年 2 月)	L.1 ラオス料理	L.1 ラオス料理の作り方紹介 振り返り	◇LJC 訪問の日本人ゲスト (日本語教師) 3 名 ラオス料理の作り方を紹介 → 質疑応答
	L.2 異文化理解	L.2-1 外国での生活 L.2-2 国民性 L.2-3 ラオスと日本の習慣・マナー Eメールの答えを共有 ↓ ラオスの習慣・マナーに関する O×クイズ作成 振り返り ↓ 学習者の顔写真付きの寄せ書き作成 振り返り	①ラオスに住んだ/来たことがある日本人 Eメールで質問 (ラオスで失敗した/困ったこと、日本の習慣・マナー) ②ラオス国際協力研修に参加する G 大学生との JICA-Net での交流 (2007 年 12 月実施、他クラスの学生も参加) JICA-Net (テレビ会議システム) を使った交流会にて、 O×クイズ形式でラオスの習慣・マナーを紹介 → 質疑応答 LJC から寄せ書き送付 ↓ ③G 大学生との交流会 於 LJC (2008 年 2 月実施、他クラスの学生も参加) ラオス料理の作り方を紹介 (→ 質疑応答)
	L.3 夢	L.3-1 私の夢 L.3-2 あったらしいなあ	他クラス (中級) の学習者、LJC 日本語コース講師 作文発表 (試験) : 私の夢
その他			◇G 大学生のラオス国際協力研修サポーター (ホームステイなど、選抜者のみ) ◇第 5 回ラオス日本語スピーチ大会 (2008 年 3 月実施、LJC 中級学習者 2 名出場)

5.2 実践に対する評価と改善

本コースを開講して以来、学習者へのアンケートや担当講師の評価をもとに、改善を試みてきた。また、2007-2008 年度第 1 学期からは、教室外と連携して行った活動が学習者のみならず相手側にとっても意味のある活動であるかどうかを評価するため、『つながる』相手側にもアンケートを依頼し、多方面からの評価を行うことにした。以下では、2006-2007 年度第 2 学期（InA）と 2007-2008 年度第 1 学期（InB）における教室内と教室外とのつながりを重視した活動に焦点を絞り、その実践に対する評価と今後に向けた改善点を述べる。

5.2.1 InA クラスの実践に対する評価

中級コースの第 1 段階である InA クラスでは、本コースの目標や進め方、勉強方法について講師と学習者間に共通認識を作るための時間を設定するとともに、自律学習支援となる辞書の貸し出しと引き方の指導を始めた。また、『つながる』ツールとして、日本語での E メール送受信の仕方を指導した。この際、文字化けなどの問題を防ぐため、学習者に Yahoo! JAPAN のアドレスを取得させた。日本語で E メールを送受信した経験のある者が少ないだけでなく、ラオス語の E メール経験のない者、パソコンに不慣れな者もいたため、ローマ字入力の指導から始め、日本語入力ができるようになると、形式やマナーも指導した。これらのやりとりは、担当講師との間でのみ行われたため、教室の内と外とのつながりという観点から見ると、活動は LJC 内に留まった。

5.2.2 InB クラスの実践に対する評価

続く InB クラスでは、前学期に教室内外をつなぐ活動が取り入れられなかった反省を活かし、教室外に『つながる』活動も意識的に設計した。その際、活動を授業と連動させるだけでなく、活動と活動のつながりも重視した。これは、G 大学の国際協力研修生が毎年 LJC を訪問しており、2007 年度も早い段階から訪問予定が決まっていたため、学期開始前の段階から『つながる』活動をカリキュラムに組み込むことができた。

この学期には、先の InA で講師との間でできるようになった E メールを利用した教室外の日本人との『つながる』場を設定・実施した（表 2 参照）。具体的には、ラオスに住んだことや来たことがある日本人に、ラオスの習慣・マナーを知らずに失敗したり困ったりした経験を尋ねるというタスクを設けた。この活動を通して、学習者は、E メールを通じた依頼・情報収集・お礼という一連のやり取りができるようになった。この時、『つながる』相手としてそれまでの『つながり』を活用し、その日本人と再び『つながった』学習者もいた。

次に、その E メールで聞いた質問に対する回答をクラスで共有した後、ラオスの習慣・マナーに関する〇×クイズを作成した。そして、G 大学の学生とのテレビ会議システム（JICA-Net）を利用した『つながる』場を設計・実施した（表 2 参照）。この JICA-Net による交流は、その後に予定されていた LJC における対面での『つながる』場がより円滑に進み、『つながり』を深くするための事前活動として位置づけ、設計したものである。

JICA-Net による交流実施後、LJC 学習者、相手側の学生、相手側の先生に行った評価の結果によると、LJC 学習者からは、相手の反応が即時的かつ視覚的に見られたことにより、『伝わった』という実感を得たという声が聞かれた。しかしながら、普段は授業を行っていない昼間に行われたため、時間的な問題で参加できなかった学習者がいた。相手の学生からは、ラオスでの研修に向けた情報収集の場となり、関心や期待、さらには意欲が向上したという声が多かった。相手側の先生からは、学生が国際協力の現場を認識できたよさだという評価を得た一方で、システム上の音声や画像の不明瞭さ、時差が指摘された。そこで、LJC での対面での交流会に向け、LJC 学習者の顔写真付きの寄せ書きを作成し、G 大学に郵送した。

JICA-Net による交流を経て、G 大学の学生がラオスを訪れ LJC を訪問した際に、対面での交流会を設け、『つながる』場を設計・実施した（表 2 参照）。InB クラスはラオス料理の作り方を紹介したが、これは、既に行った活動であり、その時の学習を応用させて、紹介する料理を選び、写真や実物も使いながら発表した。

この交流会について、LJC 学習者からは、日本語を使って『伝え合う』ことができた達成感と自信を得た様子がうかがえ、「日本の友達ができた」「またしたい」という感想があった。相手の学生からも、事前活動後の交流会実施や LJC 学習者の発表内容に関しての有効性が聞かれた。具体的には、「初めて会うのに事前に JICA-Net で話していたため、すぐに打ち解けられた」「事前に LJC 学生の写真を（寄せ書きで）見ることでよかったので、会った時に～さんですね、とすぐに打ち解けることができた」である。また、研修を経て、ラオスや開発途上国、援助に対する考え方が『変わった』きっかけの一つが、LJC 学習者との交流であったという意見や、E メールや JICA-Net などを通じて今後も『つながりたい』という意見があった。相手側の先生からも、「事前活動が研修を身近に感じ準備するのに役に立った」「交流会の（LJC 学習者の）発表内容が日本人学生のラオス訪問に役立つ内容であった」という声があった。しかし、「時間が短かった」「発表のレジュメがあるともっとわかりやすかった」という指摘もあり、これは今後の課題である。

これらの実践に対する評価から、教室内と教室外を『つなぐ』活動は、学習者のみならず、双方にとって有効性を感じられる意味のある活動であったことがわかった。また、対面で『つながる』ための準備として、通信を利用した事前活動を行ったことが、対面した時に『つながりやすく』なり、その後も『つながりあって』いきたいという気持ちを高めていた。このように、ある活動で『つながった』相手が、別の活動の『つながる』相手候補となるような良い循環を生むためには、教室内外を『つなぐ』活動を取り入れ、段階的かつ継続的にアプローチしていくことが必要である。

5.2.3 今後に向けた課題と改善

InB クラスの学期末に学習者にとってアンケートによると、学習者が自分の日本語力の伸長を実感していることがわかった。また、「日本人との交流会があって楽しい」「日本人との交流の機

会や会話の時間がもっとほしい」という声からわかるように、本コースでの学習を楽しみとしても評価し、『つながる場』を求める気持ちが増したように感じられる。さらに、『伝える』相手を想定し、わかりやすく『伝える』ために、必要な内容や方法を厳選できるようになった。例えば、G 大学との交流会における料理紹介の活動では、教室内で学んだことを活かし、工夫していた。

しかしながら、初級の既習文型の整理・定着が不十分なことが原因で、わかりやすく『伝える』ための正確さに欠けている学習者もいた。そのような学生へのフォローが不十分であった反省を活かし、現在開講中のクラスでは、授業では扱わない文法事項の復習を宿題として出すようにしている。

さらに、大学の授業などとの兼ね合いや社会人の学習者の割合が増したことによって、学習者の予定と成果発表の時間設定が合わないこともあった。この原因として、LJC 来訪者がいる場合に『つながる』場を設定していたことが挙げられる。そのため、時間や内容を相手側と調整した。現在は、多様な『つながる』場・相手・期間・方法の提供を目指し、将来的には協力者のネットワーク化を視野に入れ、ラオス在住の日本人へも協力を依頼し始めた。一方で、LJC 内においては、他クラスの学習者との学び合いの場にもなるようなタスク・成果発表を実施していきたい。

6. 活動型中級コースのモデル提示

6.1 活動型中級コースにおけるシラバスの体系化

活動型中級コースを開講して2年が過ぎ、実践・評価・改善を繰り返して今日に至るなかで、長期的な視点にたったシラバスが体系化され始めた。筆者らは、シラバスは、コースや授業を固定化するためのものではなく、講師間さらには、学習者と講師の間で学習の方向性を共有するためのものであると考えている。この理由として、現在、LJC では中級コースを日本人講師が担当しているが、将来的にはラオス人講師も担当するようになるであろうし、日本人講師の入れかわりもある。中級コースで身につけたほうが良い技術や適当な指導時期、扱いやすいトピックなどがわかってきたので、担当講師が変わっても、指導が分断されることなく段階的に行えるようになった。InA から InB にかけて行われた E メールを使用した一連の活動は、その一例である。また、海外の現場が抱える問題の一つに、学習者の減少に伴うクラス合併への対応がある。ラオスにおいて継続的に中級コースを開講することは、学習者確保の面から難しく、最低開講人数が集まらないためにコースが開けない機関もあると聞く。LJC の中級コースでも、現在、学習者減少によるクラス合併を強いられているが、シラバスが体系化されてきたことや、活動型の学習形態をとっていることから、柔軟な対応が可能となった。具体的には、学習者によって、タスクや成果発表の方法を変えたり、難易度を上げるなどの対応をしている。

以上のように、シラバスが体系化されるに伴って明確になってきた LJC の活動型中級コースのモデルを図1のように提示する。

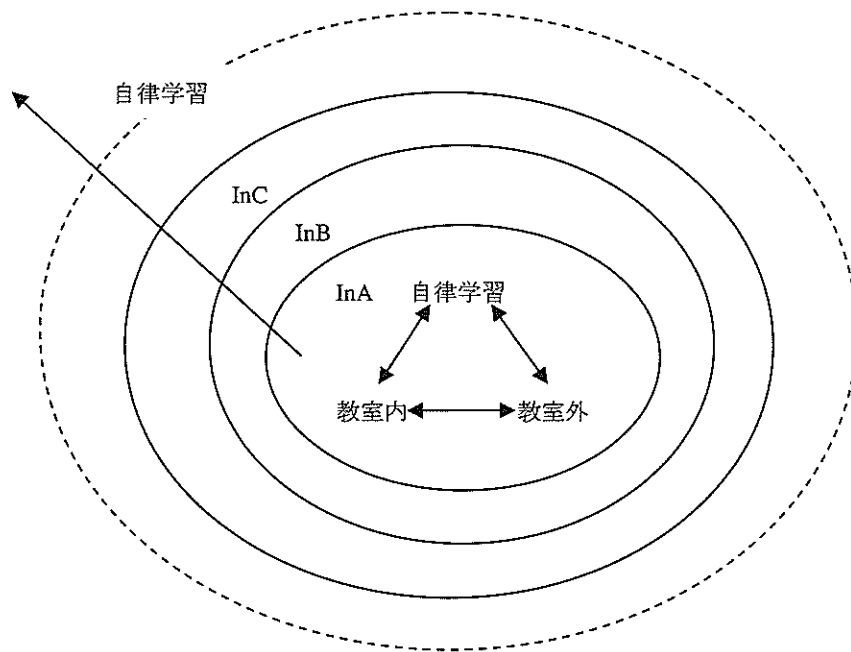


図1 活動型中級コースモデル

図1は、3学期間に渡る中級コースとコース修了後の学習者の総合的な日本語力のイメージを示したものである。本コースでは、中級コースで行う日本語使用の範囲を「教室内」「教室外」「自律学習」に広げ、三者が同時に伸びるように設計している。例えば、教室内で扱う「語彙」（表1参照）は、あらかじめ配布されるプリントには、語彙が日本語だけで一覧になっているので、辞書を使って意味を調べることは自宅学習となる。これは、教室で意味の確認や例文作成をした後に行われる「発話」でラオスの学習者にとって使用頻度が高い語彙を選んであり、「教室内」と「自律学習」を結んでいる。また、先の実践例では、「自律学習」としてEメールの指導を行い、「教室外」活動として日本人に質問をして、情報収集し、さらに「教室内」活動においてクラスメイトと情報を共有した。このようななかで、InAからInBへ段階が上がるとともに、円が大きくなることが期待され、InCを終えた後にも一人で学習していける力の育成を目指す。この円は、クラスによってだけでなく、個々の学習者の能力によっても大きさやバランスが異なるものであり、その拡張は終わりが無いと言える。

6.2『伝え』『つながり』そして『変わる』へ

「教室内」「教室外」「自律学習」を設計するにあたり、前述のように、日本語で『伝える』ことにより、学習者が日本語を介してラオス社会や日本社会と『つながる』こと、学習者とラオス社会あるいは日本社会が互いに影響や刺激を受けて『変わる』ことを、常に心がけている。

川上（2008）は、多言語化、多文化化する「移動する時代」を生きる「移動する子どもたち」にとっての「ことばの力」の育成について述べた中で、「子どもが日本語を使って主体的に、かつ自覚的に自己の意見や考えを語るという行為」は、（中略）他者との間に起こる社会的行為である。したがって、日本語の習得は（中略）、日本語を使いながら、自分の考えを他者に伝え、他者の考

えを日本語で理解するという「やりとり」によって生まれると考えるべきである。他者との「意味のある文脈」における日本語による「やりとり」が、ことばの力を育成し、そのことが異文化間対応能力（Interculturality）を育成すると考えることが重要である、と主張する。この「移動する子どもたち」を LJC の「学習者」に、「他者」を LJC の「学習者と『つながる』相手」と置き換えてみると、日本語で『伝え』、相手と『つながる』ことを重視したコース設計の意義・重要性が示唆できる。川上（2005, 2008）の言葉を借りれば、ラオスや自分自身のことを、「教室内」ではクラスメイトや講師に、「教室外」ではラオス社会や日本社会に『伝える』という行為は、「文脈化」した状況で「個別化」された内容を「統合化」し、行っている。そして、そうした「やりとり」の結果、例えば G 大学との一連の「やりとり」の中で、学習者と相手の双方が『変わった』と答えていたように、お互いが異文化を知り、理解し、自己を振り返るきっかけとなっていたのではないだろうか。

以上のことから、「教室内」「教室外」「自律学習」を相互に関連させ、『伝える』『つながる』『変わる』を中心に据えた活動型中級コースの意義を唱えることができる。

7. おわりに

LJC の活動型中級コースは、その国・地域ならではの、学習者と相手側双方にとって魅力ある学習活動の設計・実践を通して、もっと『伝えたい』という気持ちになり、相手と『つながる』ことで、達成感や自信、楽しさを感じ、自分自身が『変わる』ためのきっかけになってほしいという願いから生まれた。ビエンチャンは一国の首都であり、LJC は施設や設備も整っており、『つながる』相手も存在する。今後もこれらの恵まれたリソースを活用し、わかりやすく『伝えて』、相手と『つながり』、影響や刺激を受けた双方が『変わって』いけるようなコース設計を目指す。そして、中級コースでの学習を終えた後、学習者が一人でもそれらを実践していける「日本語力」と「技術力」、そしてそれらを支える「自律学習能力」を伸ばすコースを運営していきたい。

参考文献

- 岩井理子・小柳昇（2002）『ニューアプローチ中上級日本語 完成編』、日本語研究社
- 川上郁雄（2005）「言語能力観から日本語教育のあり方を考える」『リテラシーシリーズ 1』くろしお出版、pp.3-18
- 川上郁雄（2008）「「移動する子どもたち」と日本語教育」『タイ国日本語教育研究会 20 周年記念 セミナー予稿集』タイ国日本語教育研究会、pp.26-41
- 小柳昇（2003）『ニューアプローチ中級日本語 基礎編 改訂版』、日本語研究社
- 小山悟（2002）『ジェイ・ブリッジ』、凡人社